

手の中に収まる百人の歌仙

変体仮名はしる美しい口誦の響き

長谷川 栄

フランス政府芸術文化シユバリエ勲章叙勲
東京国立博物館名誉会員・日本書道教育学会顧問

「座を挙げて恋ほのめくや歌かるた」。これは高浜虚子の句で、百人一首のかるたとりに興ずる座敷での、男女の間に通う、えもいわれぬ仄かで、淡い恋のころをうたったもので、平安王朝時代の貝合わせから発展した、百人一首の遊びが、今もしつとりと息づいていることを物語っている。

そして、中村雪柳さんは歌仙ごとに、幕末、明治まで庶民の日常に生きていたあの、変体仮名^レを使用し、字形から起きる絶妙な詩的暗喩の効果を、得意な古筆の清雅優麗な変体仮名、平仮名交じり和様書によって、現代的にパーソナルに表現している。

書も絵も短詩形文学も、秀れてバランス良く完結された中村雪柳さんにして、はじめて可能になった新分野の開拓で、かつて光悦が書を、光琳も文晁も絵を描いた百人一首の歴史をふり返り、その新しい試みに拍手を送るものである。

二〇一三年 四月一八日

小倉百人一首「夢のうきはし」

はしがき

現代においても、仮名書道では古歌を書く必然性もあつて、万葉仮名(楷書ないし行書を借字)や、変体仮名(明治三十三年に平仮名は一音一字と定められたが、そのときに、選ばれなかつた文字)、平仮名(借字が更に草体化)を使って旧仮名遣いで作品制作をしている。毛筆で古歌などを書く場合、文字と文字が滑らかに繋がるのが肝要であるので、流麗に表現するには、繋がりやすい数多くの万葉仮名、変体仮名、平仮名を知っておく必要がある。

また、「文字面(づら)の良いものを選ぶ」ことと、「文字の潤濁」は、読み易くするばかりではなく、文章に陰喩を生じさせ、絵画的要素や心理的要素などを加えることにもなる。この二点は、仮名書の命とも言える大切なものである。これらは仮名を読めない外国の人々においても、日本のかな文字に魅力を感じる所以であろう。

同様に、墨と紙の調和も仮名書、漢字書を問わず、書道においては重要である。そのため当カルタは、鳥の子和紙に印刷し、カルタの風合いを大切にと心掛けた。

さて、余談で恐縮ではあるが、印刷前のカルタの、最終校正が終わった日は、五月二十七日であった。奥野かるた店の会長奥野伸夫氏と、印刷を請け負う北星社、開発部の中村忠夫氏のお二人が、「今日は『百人一首の日』だと、テレビで言っていましたよ。藤原定家の明月記に、『百首を選び障子に貼った』と、あることからそうならしいですよ。」とのこと。私は、「まあ、ホントですか、奇しくも、今日は私の誕生日です。」と言ったので、三人は「不思議なご縁ですねえ。」と言って笑った。数十年間、百人一首カルタを仕上げたいと思っていたことが、ご縁となったのか。このカルタ制作には評論家、長谷川栄氏、創美出版社社長、坂田良江氏など関係各位に、一方ならぬお世話になった。

この小倉百人一首「夢のうきはし」により、仮名書を味わい、仮名書の理解を深め、次代に仮名文字が繋がっていく一助となれば幸甚である。

二〇一三年 五月二十八日

書家 中村 雪柳